

令和5年度 第4回丹後「子育て」サポート協議会の概要

1 日時 令和6年1月26日(金) 15:00~17:00

2 場所 京都府宮津総合庁舎 本館1階第2・3会議室

3 出席者 丹後「子育て」サポート協議会顧問
杉岡秀紀(福知山公立大学地域経営学部准教授)
丹後「子育て」サポート協議会委員4名
多々納智(京都府宮津天橋高等学校 教諭)
野木俊宏(京都府丹後海と星の見える丘公園 園長)
櫛田啓(社会福祉法人みねやま福祉会 たらす峰夢施設長)
関奈央弥(合同会社 tangobar 代表社員)
各市町教育委員会担当者4名
丹後教育局4名

4 報告

- ・高校生意識調査アンケート協力校への結果返却について
- ・令和4年度第4回から令和5年度第3回の協議概要

5 協議

(1) 「今年度の協議のまとめ① 丹後で育つ18歳の姿に必要なサポート環境」

ア 大人が子どもに関わる場とは

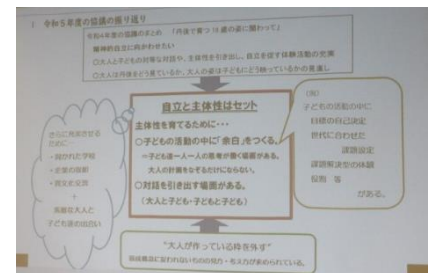
- ・家庭、学校、就学前施設、社会体育、習い事、塾、自然体験施設 等

イ 自然体験活動を主催する立場で子どもと関わる大人について

- ・家庭に目を向ける。活動への参加理由として、保護者が、何か課題を抱えていることや体験に期待する思いがあることを前提に子どもを参加させていると考える。
- ・親子の対話が生まれるような案内文の工夫をする。
- ・活動に参加することで、子どもの変容とともに、親にも、ものの見方や考え方に変容が見られるように働きかける。
- ・子どもと大人がフラットな関係の中で体験活動をする。一つのテーマに対して、個々の主体性に委ねながら自然に関わりが生まれるプログラムとする。そのためにも枠を作り過ぎない。

ウ 親・先生の立場で子どもと関わる大人について

- ・大人が作る枠が子どもの主体性を奪っていないか。
- ・例えばPTA挨拶運動は、子ども自身が「挨拶をしたい」と思って取り組んでい



るのか。挨拶をしたい理由について子どもから「挨拶すると褒められるから」という声を聴くと、挨拶運動の意義に疑問が生じる。大人が作った枠に当てはめる形で、大人の価値観に基づく理想像を子どもに求めてしまっているのではないか。

- ・校則は大人の作る枠であり、その枠に当てはめようとするあまり、子どもが不平不満という自らの意思を伝える機会を奪っていく。大人に噛みつく牙が抜けていく。「諦め」が主体的な行動の阻害を生む。
- ・子どもがもっと自分の意思を安心して伝えられる環境が必要である。
- ・大人が枠を作ることで、枠がなければ動けない人、または枠の外のことならば動かない人を育てることもつながってしまうのではないか。
- ・子どもが自分たちでルールを変えられる・作ることができるという経験を積むことが必要であり、主体性につながる。小中学校の特別活動の充実は有効である。
- ・子どもに「委ねる・任せる」ときに意識することとして、学校は、事故等、安全への配慮が最優先されるが、失敗が許され、成果を求め過ぎない場でありたい。

エ 社会人として子ども（及び若者）と関わる大人について

- ・チャレンジの提案等があっても変化に対して抵抗感が強く、管理職級の大人が決断力をもっていない企業は新卒社員の離職増加やそもそも入社希望なしといった状況があることを聞いた。企業もやってみたいことについて対話できる姿勢が求められている。
- ・ある高校の生徒会長に就任した生徒は、公約として教職員のみの特権であった校内での電子レンジ及び電気ポット使用の権利を勝ち取ることを宣言した。そういった主体性が育った背景には、アルバイト先での様々な大人との関わりが影響しているようである。

オ 小中学校時期の発達段階を踏まえて主体性を育てるための切れ目ない関わり方

- ・家庭や学校ではない場所で出会う親や先生とは違う立場の大人の場合、家庭や学校ではできないことをさせてやる環境を整える。
- ・未就学児や小学校低学年なら、その場の体験が「面白い・楽しい」と感じられる学びとなるように関わる。
- ・小学校中学年くらいから大人と近い接し方で関わる。対話を重視する。個人の性差にも配慮する。
- ・小学校高学年から中学生くらいになると「頼る・任せる」部分を意識して関わる。
- ・大人として様々な年代の一人一人と個性を見つめながら接する中で関わり方を学ぶことができた。「教えてやる」という姿勢ではなく、子ども一人一人が何を感じているか、興味関心をもっているかに寄り添う姿勢を大切にしている。

カ 大人の枠の中で子どもの行動を見てしまわないために必要な視点

- ・事例として、大きな石を人に向かって投げた子どもがいた。その子どもに対して、大人の価値観だけでの関わりなら、「人に石を投げてはいけない。」と叱ることで終わる。しかし、この事例の場合、対話を重ねたことで「石をなげると人に当たる」ということを考えられていないというその子どもの認識に気付けた。その認識をもとに順を追って石を投げてはいけないことを理解させる更なる対話へとつ

なだった。

- ・子ども一人一人の人となりや背景は、大人の価値観だけでは見えてこない。
- ・相手目線での対話が重要である。
- ・児童福祉の分野でも子どもの不適応行動に対する対処的な対応ではなく、過去の体験や養育歴、学校の対応など様々な因果関係に目を向けた上で関わることを重視している。学校へのスクールソーシャルワーカーの配置などは子ども、親、先生をサポートしていく観点からもっと推進されるべきである。



キーワード「大人の枠を外す」「対話」「許容（度量）」

(2) 「今年度の協議のまとめ② 協議に係る情報発信のメインテーマ」

ア 情報発信の形式案「丹後子育て宣言」

- ・大人の宣言とする。
- ・子どもが自立・成長する「子育て」のための大人の関わりの指針や覚悟を示す。
- ・地域が主体的に子どもに関わる意識を高めるようなメッセージを示す。
- ・(委員自身の) 事業や活動、地域の様子から子どもと大人が関わり合う時間が少ないと感じる。例えばスポーツや趣味であれば多世代がつながる機会ができる。地域の大人でそういった機会を作っていこうとする機運を高めるようなものにする。
- ・自治体が住民と目指すまちづくりの方向性を共有した事例として朝来市の未来を切り拓く「みんなの合言葉」は参考になる。

イ 本協議会として大切にしたい視点

- ・本物の体験・経験の意義が伝わるものにする。子どもが「やってみたい」という欲求に大人がとことん付き合った先には、子どもの自立・成長につながる価値ある学びがある。
- ・ある農泊施設では、陶器を使用している。普段プラスチック製の食器を使っている子どもにとっては、陶器を落とすと割れることや割れた陶器を職人が修復できることを知る機会となる。本物に触れる体験によって食器を大切に扱うことを学ぶ。
- ・畑正憲さんは「小さい頃にたくさん生き物を殺生した人ほど優しくなる。」と語っていた。たくさんの生き物を殺める体験は、生命の死と多く向き合うことであり、死というものを理解していく経験を重ねるということではないか。
- ・子どもは主体的な体験・経験を通じて自立・成長していく。大人は、そうした子どもが自ら育とうとする力に制限をかけないことが重要である。
- ・丹後には、都会では触れられない本物がある。丹後が価値ある環境であることを丹後の大人がもっと知る必要がある。

(3) 「来年度の協議の方向性について」

ア 協議の柱について

- ・小中学校時期の子どものサポート環境について引き続き協議する。
- ・来年度も丹後海と星の見える丘公園事業「丹ガキ」の視察を実施する。
- ・各委員による「子育て」関連事業の実践を交流する。
- ・高校生意識調査アンケートについて経年変化等を調査していくため、来年度も継続する。今年度と同時期での実施、返却、HP公開を予定している。アンケート結果についてPTA等、丹後教育局関連団体にも情報発信し、活動の充実のために活用していただく。
- ・本協議会のメインテーマの情報発信について令和7年度の実行を目指し、具体策を協議する。

イ 来年度検討事項

- ・小学生・中学生・高校生を含む若い世代による本協議会への参加を検討する。
- ・若い世代が参加する場合には、意見が割れるようなテーマ設定をして対話の質が上がる協議が望ましい。
- ・オンラインでの参加、クロスワークセンターMIYAZUとの連携等、若い世代が参加できる形を探っていく。

6 指導助言（杉岡顧問）

(1) 本協議会の強み

- ア 高校生意識調査アンケートについて、様々な可能性を感じる事業であり、本協議会の強みである。現状の校長等へのフィードバックだけではもったいない。今後、振興局中心に報道機関への発信も検討すべきである。
- イ 本協議会委員を含め、魅力的で興味深い方々と原点回帰できる。
- ウ 中高校生に対する本協議会のような場の設定が今後は重要になってくる。

(2) 来年度の協議をより充実させるための視点

ア 「問い」について

- ・大人自身が「問い」について再認識し、大切にしていく必要がある。
- ・周囲の「当たり前」について、疑う視点を持ち、「問い」の力を高めることが重要である。

イ 学校ごとの特色について

- ・長野県伊那市立伊那小学校は公立でありながら60年以上も通知表がなく、チャイム、時間割もない学校。児童の主体性を伸ばすための探究的な学びを大切にしている。丹後の学校ごとに、もっと特色があってもいいのではないか。
- ・高校生意識調査アンケートでは拾えない声を小中学校から拾い集めることが必要である。

ウ 大人と子どもの関係について

- ・現代は、大人と子どもの境界線が曖昧になっている。大人の自覚なく年齢を重ね

ている大人もいる。

- ・大人と子どもがフラットに関わる場があってもいいのではないか。以前の協議でも話題に挙がった「丹後親子修学旅行」などがあってもいい。
- ・大人と子どもが横や斜めの関係で関わり合うことを提言していくのはどうか。

エ 同調圧力について

- ・主権者教育に関わる中で、日本の社会にある同調圧力の大きさを感じるが、少しずつ意見を主張する動きは見られる。まだまだ同調圧力にあらがっていくことが求められる。
- ・同調圧力は論理的に働いているわけではないので、多数派の動きをポジティブな働きに生かすことを考えていくとよい。

オ 民から始まる公共について

- ・兵庫県朝来市生野地域に「しゅわわ邸」という場所がある。元 JICA でエジプトでの教育支援を経験されたアーティストが地域おこし協力隊で生野へ赴任した後、自宅を開放し地域の人々の居場所づくりを始められた。そこに立ち寄る各々がルールを自分たちで作成し、その家、空間自体がアート作品として存在している。
- ・官ではなく、民から始まる公共を作る視点も必要ではないか。今後、そうした事例の調査・情報収集もしていくとよい。

カ 斬新な組織づくりの事例について

- ・立命館アジア太平洋大学が、特命副学長を公募し、応募した高校生から任命すると発表した。そういった運営を許容できる点に興味を湧く。「なぜ」というところで哲学的な対話ができる。

